

# 「茅君内伝」 訳注研究 (一)

廣瀬直記

## 前書き

『茅君内伝』は茅氏三兄弟の成仙過程を描いた内伝（秘密の伝記）であり、東晋中期に茅山の麓で神降ろしを行なった楊羲（330～386?）と許謐（305～376）、許翽（341～370）が神々に授けられたものとされる。この内伝には茅山およびその地下に広がるとされる華陽洞天に関する極めて貴重な記述が含まれているが、現行のテキストにはいくつかの異本と数多くの佚文があり、非常に複雑な様相を呈している。とくに、洞天研究の重要資料のほとんどが佚文のほうに残されていることは大きな問題である。そこで私たちとしては、『茅君内伝』の訳注を提供すると同時に、そのテキストがばらばらになる以前の姿をできる限り復元し、洞天研究の重要資料を『茅君内伝』本来の文脈のなかに還元して捉え直すことができるようにしたい。なお、『茅君内伝』の下読みは土屋昌明氏とともに進めた。記して謝意を表す。

## 凡例

1. 底本には上海涵芬楼影印『正統道蔵』所収の元・劉大彬編『茅山志』巻五「三神紀」を用いる。
2. 底本の意味が通りにくい場合にのみ、異本を用いて校訂を行なう。主な異本は『正統道蔵』所収の北宋・張君房編『雲笈七籤』巻百四「太元真人上嶽上卿司命真君伝」（雲笈本）であるが、他の断片的な引用文を用いることもある。
3. 参考として、底本と異本との対照、および佚文の底本への還元をこころみる。その際、異本の文章のうち、底本に存在しない部分は下線を引いて示す。
4. 『茅山志』巻二十「九錫真人三茅君碑文」（梁普通三年、522年）は『茅君内伝』の一部を下敷きにした碑文であり、必ずしも異本とはいえないかもしれないが、由来の最も古いテキストであるため、底本との対照を行なう。
5. 便宜的に作った段落ごとに作業を進める。各段落は【原文】【校訂】【訓読】【語釈】【通釈】【参考】という構成をとる。
6. 全体にわたって、（ ）は説明、言い換えおよび取り消された文字を、〔 〕は追加と補足を、〈 〉は注文と小字を示す。

段落 1 (1a ~ 2b)

【原文】

茅山志卷之五。

上清嗣宗師劉大彬造。

三神紀。

茅君眞胄。

【校訂】

①氏・・雲笈本には「世」に作る。訓読以下、こちらに従う。

②稟・・雲笈本には「秉」に作る。訓読以下、こちらに従う。



大司命君姓茅、諱盈、字叔申、咸陽南關人也。姬胄分根、氏族於茅。積德累仁、祚流百氏①。高祖諱濛、字初成、一字本初。深識玄遠、察覽興亡、知周之衰、不仕諸侯、廼師於北郭北阿鬼谷先生。長往華山、道成、以秦始皇三十年九月庚子、乘龍白日昇天。時邑童謡歌曰、神仙得者茅初成、駕龍上昇入太清。時下玄洲戲赤城、繼世而往在我盈。帝若學之臘嘉平。始皇聞之、詢諸父老、具對曰、此仙人之謡。勸帝求長生之術。於是始皇忻然有尋仙之志。因改臘曰嘉平。曾祖偃、字泰能、濛之第四子、仕秦昭王、為舍人、遷車騎校尉長平恭侯。祖諱恚、字世倫、仕莊襄王、為廣信侯。始皇即位、以為德信侯。生六子、並知名於時。其第六子諱祚、字彦英、不仕不學、志慕農桑、生三子。長即大司命君也。次子諱固、

字季偉。第三子諱衷、字思和。司命君生于漢景帝中元五年丙申歲、二弟於戊戌庚子歲。三君少稟<sup>②</sup>異操、天才穎悟、矯志蕭抗、獨味清虛。嘗謂二弟曰、世務紛錯、履冰嶮巖。當慕高祖之逸舉。唯願肥遁之利貞耳。年十八、棄家辭親、入恒山中、讀道德經、周易傳、采朮服餌、潛景絕崖。

### 【訓読】

茅山志卷之五。

上清嗣宗師劉大彬造。

三神紀。

茅君眞胄。○高祖濛。〈鬼谷先生<sup>①</sup>を師とし、華山に隱る。道成りて、龍に乗りて昇天す。〉○——○曾祖偃。〈秦の昭王の世に仕へ、車騎校尉<sup>②</sup>長平恭侯<sup>③</sup>に終る。〉○——○祖熹。〈秦に仕へて徳信侯と爲り、會稽に終る。〉○——○父祚。〈徳信侯の第六子。仕へず。〉○——○大司命君盈。○定録中君固。〈漢に仕へて武威<sup>④</sup>太守たり。〉○保命小君衷。〈漢に仕へて西河<sup>⑤</sup>太守たり。〉

大司命君 姓は茅、諱は盈、字は叔申、咸陽南關の人なり。姫胄 根を分け、族に茅に氏とす。徳を積み仁を累ね、祚 百世に流る。高祖 諱は濛、字は初成、一には本初と字す。深く玄遠を識り、興亡を察覽し、周の衰ふるを知り、諸侯に仕へず、迺ち北郭北阿の鬼谷先生<sup>①</sup>を師とす。長じて華山に往き、道 成るや、秦の始皇三十年九月庚子を以て、龍に乗りて白日昇天す。時に邑童の謡歌に曰く、神仙 得る者は茅初成、龍を駕して上昇し太清に入る。時に玄洲<sup>⑥</sup>に下り赤城<sup>⑦</sup>に戯れ、世を繼ぎて往くは我が盈に在り。帝 若し之を學べば臘<sup>⑧</sup>は嘉平たり、と。始皇 之を聞きて、諸を父老に詢れば、具さに對へて曰く、此れ仙人の謡なり。帝に長生の術を求めんことを勸む、と。是に於いて始皇は忻然として尋仙の志有り。因りて臘を改めて嘉平と曰ふ。曾祖 偃、字は泰能、濛の第四子、秦昭王に仕へて、舍人と爲り、車騎校尉長平恭侯に遷る。祖 諱は熹、字は世倫、莊襄王に仕へて、廣信侯<sup>⑨</sup>と爲る。始皇即位して、以て徳信侯と爲す。六子を生子、並びに名を時に知らる。其の第六子 諱は祚、字は彦英、仕へず學ばず、農桑を志慕し、三子を生む。長は即ち大司命君なり。次子 諱は固、字は季偉。第三子 諱は衷、字は思和。司命君は漢の景帝中元五年丙申の歲に生まれ、二弟は戊戌庚子の歲に於いてす。三君<sup>⑩</sup>は少くして異操を乗り、天才穎悟、志を蕭抗<sup>⑪</sup>に矯し、獨り清虚を味わふ。嘗て二弟に謂ひて曰く、世務 紛錯として、氷を嶮巖に履む。當に高祖の逸舉を慕ふべし。唯だ肥遁<sup>⑫</sup>の利貞<sup>⑬</sup>なるを願ふのみ、と。年十八にして、家を棄て親を辭し、恒山の中に入り、道德經、周易の傳を讀み、朮<sup>⑭</sup>を採りて服餌し、景を絶崖に潜む。

### 【語釈】

①鬼谷先生・・縦横家の蘇秦、張儀の師とされる。『史記』卷六十九「蘇秦列

伝第九」に「蘇秦者、東周雒陽人也。東事師於齊、而習之於鬼谷先生」、卷七十「張儀列伝第十」に「張儀者、魏人也。始嘗與蘇秦俱事鬼谷先生」とある。

②車騎校尉・・架空の職位か。『後漢書』卷六の劉放注に「劉放曰、……今此誤云胡騎車騎。當改胡作屯、車作越。且二漢有車騎將軍、及騎都尉官耳。無車騎校尉也」とある。

③長平恭侯・・架空の爵位か。明の王世貞『讀書後』卷七「書三茅真君伝後」に「以李斯為丞相、尚不得侯。而何以有長平侯偃、廣信侯熹也。戰國有號無諡。始皇不立諡。何以又有長平恭侯也」とある。

④武威・・現在の甘肅省中部に位置したようである。譚其驤編『中国歴史地図集』第二冊、中国地図出版社、1982年を参照。

⑤西河・・現在の山西省北部から内モンゴル自治区にかけて位置したようである。譚其驤編『中国歴史地図集』第二冊を参照。

⑥玄洲・・東海の仙島。『真誥』卷十二の許謚の書簡に「自謂西造閩圃、東遊玄洲、不爲遼絶」(1b)とある。なお、『十州記』には「玄洲在北海之中戌亥之地」(2b)とある。

⑦赤城・・霍山にある司命神の役所。『真誥』卷九に「霍山赤城亦爲司命之府、唯太元真人、南嶽夫人在焉」(21b ~ 22a)とある。

⑧臘・・十二月のこと。『史記』秦本紀第五「十二年、初臘」の『正義』(唐・張守節)に「臘、廬盍反。十二月臘日也。秦惠文王始效中國爲之、故云初臘。獵禽獸、以歲終、祭先祖。因立此日也」、また『史記』始皇帝本紀第六「三十一年十二月、更名臘曰嘉平」の『索隱』(唐・司馬貞)に「廣雅曰、夏曰清祀、殷曰嘉平、周曰大蜡、亦曰臘、秦更曰嘉平。蓋應歌謠之詞、而改從殷號也」とある。

⑨広信侯・・語釈③を参照。

⑩三君・・ここの「三君」は『茅君内伝』全体の文脈に合わない。なぜなら、盈が若いころから仙道を志したのに対し、二弟が仙道を志すのは年老いてからだからである。雲笈本に「盈少秉異操」、『茅山志』卷二十「九錫真人三茅君碑文」碑文に「君稟元靈於妙始」とあるのに従って、本来は「盈」あるいは「君」だったと考えるべきだろう。

⑪蕭抗・・孤高の意味か。蕭は「ひっそり」、抗は「高い」と解釈した。

⑫肥遁・・『周易』下経の遯卦に「上九、肥遯、无不利」とある。「ゆったりとその隠れ家に自得していられる。これを肥遯という」(本田濟『易』、朝日新聞社、1966年、255頁)。

⑬利貞・・『周易』上経の乾卦に「乾、元亨、利貞」とある。「利は宜、貞は正しくて固(持続的)の意味である」(本田濟『易』、2頁)。

⑭朮・・陶弘景『神農本草経集注』卷三「草木類上」に「朮、味苦甘、温、無毒。……久服輕身、延年不飢」(小嶋尚真、森立之等重輯本、南大阪印刷セ

ンター、1972年、40頁）とある。

### 【通釈】

茅山志卷五。

上清嗣宗師劉大彬造。

三神紀。

茅君真胄。○高祖父の濛。〈鬼谷先生に師事し、西岳華山に隠れ住んだ。道の修行が完成すると、龍に乗って昇天した。〉○——○曾祖父の偃。〈秦の昭王（在位前306～前251）の治世に仕官し、車騎校尉長平恭侯として生涯を終えた。〉○——○祖父の熹。〈秦王朝に仕官して徳信侯となり、会稽の地で没した。〉○——○父の祚。〈徳信侯の六番目の子。仕官しなかった。〉○——○大司命君の盈。○定録中君の固。〈漢王朝に仕官して武威太守となった。〉○保命小君の衷。〈漢王朝に仕官して西河太守となった。〉

大司命君は姓を茅、諱を盈、字を叔申という。咸陽の南関の人である。〔彼の一族はかつて〕周の王族姫氏の血筋から枝分かれして、「茅」を一族の氏名（うじな）とした。〔その先祖が〕徳と仁を積み重ねたため、幸いが〔彼をはじめ〕代々の子孫に流れ及んだのである。

さて、その高祖父は諱を濛といい、字を初成あるいは本初といった。彼は奥深い物事の道理によく通じ、国の興亡について察知することができた。周王朝が衰亡することもあらかじめ知っていたため、周の諸侯には仕えず、咸陽の北側の外城壁が立つ丘に住む鬼谷先生に師事した。また、大きくなってから西岳華山に行った。そして、道の修行が完成すると、秦の始皇三十年（前217）九月庚子の日に龍に乗って白日昇天した。当時、村の子どもたちの流行り歌に次のような一節があった。「神仙になったのは茅初成、龍を操り太清天に昇って行った。時には玄洲に舞い降り、赤城に遊びに来るが、その後を継いでゆくのはわれらが盈だ。帝がもしその教えを学べば、臘月（十二月）は嘉平（めでたくおだやか）となろう」。〔折しもその年の十二月、〕始皇帝はその歌を耳にして、村の老人たちに意味を尋ねたところ、「それは仙人の流行り歌でございます。帝に長生の術を求めるといって勧めているのです」という答えが返ってきた。そこで、始皇帝は喜んで仙人を探そうと心に決め、歌にあやかって臘月を「嘉平」と呼ぶことにした。

曾祖父の偃は、字を泰能という。高祖父濛の四番目の子である。秦の昭王（前325～前251）の舎人（侍従官）となり、後に車騎校尉長平恭侯に栄転した。祖父は諱を熹、字を世倫という。秦の莊襄王（前281～前247）に仕えて広信侯となり、後に始皇帝（前259～前210）が即位すると、徳信侯となった。彼は六人の子をもうけたが、いずれも当代に名を馳せる人物となった。その六番目の子は、諱を祚、字を彦英といい、仕官も学問もせず、農耕と養蚕に心惹

かれ、三人の子をもうけた。その長男が大司命君である。次男は諱を固、字を季偉といい、三男は諱を衷、字を思和といった。

司命君の盈は漢の景帝中元五年丙申(前145)の歳に、二弟はそれぞれ戊戌(前143)と庚子(前141)の歳に生まれた。三君は若いころから特別な志をもち、優れた才能を示した。また、進んで孤高を持し、ひそかに虚無恬淡の境地を楽しんだ。盈はかつて二弟に対し、次のように言った。「世俗の仕事にはいろいろながらみがあり、険しい山で薄氷を踏むようなものだ。われわれは高祖父の脱俗的な生き方を見習おうではないか。つつがなく隠遁できることを願うばかりだ」。そこで、盈は十八歳のときに家を離れて親と別れ、北岳恒山に行った。そして、『老子道德経』や『周易』の伝(十翼)を読み、朮という薬草を取って食べ、断崖絶壁のなかに身をひそめた。

### 【参考】

①『雲笈七籤』巻百四「太元真人東嶽上卿司命真君伝」10b～12a

太元真人東嶽上卿司命真君傳。

弟子中候仙人李道字安林撰。

真人姓茅、諱盈、字叔申、咸陽南關人也。姬冑分根、氏族於茅。積德累仁、祚流百世、誕縱明賢、繼踵相承。高祖父諱濛、字初成、深識玄遠、察覽興亡、知周之衰、不仕諸侯、乃師於北郭北阿鬼谷先生、遂隱遁華山。盤桓靈峯、逍遙幽岫、靜念神仙、高抗蕭寥、絕塵人間也。盈曾祖父諱偃、字泰能、濛之第四子也。仕秦昭王之世、位爲舍人、稍遷車騎校尉長平恭侯。毗弼霸王、有功業於時焉。盈祖父諱嘉、字正倫、仕秦莊王、爲廣信侯。始皇即位、嘉輔帝室、當莊襄王時也、秦地漸以并巴蜀、漢中、宛、郢、置南郡矣。北收上郡以東、爲河東、太原、上黨。東至滎陽、滅二周、置三川郡。以呂不韋爲丞相、號文信侯、以嘉爲德信侯、使招置賓客游士、欲并天下。始皇六年、韓、魏、趙、衛、楚、共擊秦、取壽陵。始皇使嘉將兵攻之、有功焉。衛迫東都、嘉又剋討、皆平之。始皇壯嘉志節、賜金五千斤。二十五年、秦大興兵、使嘉攻燕、遼東、得燕王而還。又遣嘉定荆、江南地皆降。是年置會稽郡。嘉將兵於會稽而亡。始皇哀其忠、因以相國禮葬之於長安龍首山西南。嘉有六子、並知名於時。始皇皆官爵承先、並各賜姓。其第六子諱祚、字彥英、不仕不學、志願農巷。即盈之父也。祚有三子。長子諱盈、字叔申。次子諱固、字季偉。小子諱衷、字思和。盈少秉異操、天才穎燦、矯志蕭抗、行邁遠逸、不營聞達、不交非類、獨味清虛、恬心玄漠。盈時年十八、遂棄家委親、入于恒山、讀老子道德經、及周易傳、採取山木而餌服之。潛景絕崖、素挺靈岫、仰希標玄、與世永違。始皇三十年九月庚子、盈高祖父濛、於華山之中、乘雲駕龍、白日昇天。先是時其邑謠曰、神仙得者茅初成、駕龍上昇入太清。時下玄淵戲赤城、繼世而往在我盈。帝若學之臘嘉平。始皇聞謠歌而問其故、父老具對曰、此仙人之謠。勸帝求長生之事。於是始皇忻然、乃有尋仙之志。因改

臘曰嘉平。

②劉宋裴駟『史記集解』卷六「秦始皇本紀第六」

十二月更名臘曰嘉平。〈太原真人茅盈內紀曰、始皇三十一年九月庚子、盈曾祖父濛、乃於華山之中、乘雲駕龍、白日升天。先是其邑謠歌曰、神仙得者茅初成、駕龍上升入泰清。時下玄洲戲赤城、繼世而往在我盈。帝若學之臘嘉平。始皇聞謠歌而問其故、父老具對、此仙人之謠歌、勸帝求長生之術。於是始皇欣然、乃有尋仙之志、因改臘曰嘉平。〉

③『茅山志』卷二十「九錫真人三茅君碑文」伝記 1a

太元真人司命君、諱盈、字叔申、咸陽南關人。以漢景帝中元五年太歲丙申、誕生茅氏之胤。年十八、棄家學道、入恒山六年〈時年二十五〉。

④『茅山志』卷二十「九錫真人三茅君碑文」碑文 3a～b

若夫有無之莫辯、陰陽之不測。故自無得而稱之。今且談其轍迹、述其攸處。君迺咸陽南關人也。始胄之興、則姬于黃帝。周公之次子、分職致宗、氏茅族焉。高祖濛、深識玄覽、絕塵華嶽。及君入山、顯乘雲駕、控龍南嶺。祖憲、才兼方員、智通文武。掃定荆揚、秦皇嘉悼、贈以相國之禮。父祚、懷淳古之氣、抱上皇之眞、不學不仕、確然而不可改也。君稟元靈於妙始、挺至德於玄符、生知獨穎、天情孤脫。深念促生之不淹、悟仙齡之可永。故能棄纓紱於宰門、服初莖於丘壑。年十八、隱居恒山、以從其道。心業二篇、口談十翼。茹芝朮以堅糧、掇薛蘿而爲服。

段落 2 (2b～3b)

【原文】

積六年、精思誠感、夢見太玄玉女把玉札而携之。曰、西城有王君。得眞道。可爲師。君子奚不往尋而受教乎。明晨覺悟、徑造西城。心齋三月、沐浴向新<sup>①</sup>、卒見王君駕神虎之駟、控轡神嶺、翱翔繡巖。於是投軀越阻、歸命道眞、不覺而至君所。王君默使衛官見攝、將還玉宮洞臺之中。良久引進、叩頭頓首、求乞長生。匍匐肘行、重陳無已。王君顧謂左右曰、形景空苦、似有志矣。迺得接引誘問、戒以勿怠、遂留洞宮。執巾履之役者十七年、王君見君謹密、稍使主領衣書圖籙。復三年、命駕造白玉龜山、因携君同詣王母於青琳宮。母曰、總眞挾肉人、以登靈臺。不亦勞乎。王君笑而不答。目君再拜請乞奇要。迺叩頭自陳曰、盈小醜賤生、枯骨之餘、敢以不肖之軀、慕龍鳳之年、朝菌之質、求積朔之期。雖仰遠流、莫之能濟。常恐一旦死於鑽訪之難、取笑於世俗之夫。遭遇王君、哀盈丹苦、粗受治身之術。豈圖今日一睹聖姿。恍惚大象、如淪神夢。救生護死、歸之乞丐。願賜長生之要、暫悟行尸之身。

【校訂】

①新・雲笈本には「望」に作る。訓読以下、こちらに従う。

### 【訓読】

積むこと六年、精に思ひ誠に感ずれば、夢に太玄玉女①玉札②を把りて之を携ふるを見る。曰く、西城③に王君④有り。眞道を得。師と爲す可し。君子奚ぞ往き尋ねて教へを受けざるや、と。明晨 覺悟すれば、徑ちに西城に造る。心齋⑤すること三月、沐浴して向かひ望めば、卒に王君 神虎の駟に駕し、轡を神嶺に控へ、繡巖に翱翔するを見る。是に於いて軀を投じ阻を越へ、道眞⑥に歸命すれば、覺えずして君の所に至る。王君 黙して衛官をして見攝せしめ、將みて玉宮洞臺の中に還る。良や久しくして引進せらるるに、叩頭頓首し、長生を求乞す。匍匐肘行し、重陳して已むこと無し。王君 顧みて左右に謂ひて曰く、形景 苦を空しくし、志有るに似たり、と。迺ち接引誘問せられ、戒むるに怠ること勿きを以てせられ、遂に洞宮に留まるを得。巾履の役を執ること十七年、王君 君の謹密なるを見、稍く衣書圖籙を主領せしむ。復た三年にして、駕を命じて白玉龜山⑦に造れば、因りて君を携へ同に王母に青琳宮に詣る。母曰く、總眞⑧肉人⑨を挟み、以て靈臺に登る。亦た勞れざるや、と。王君 笑ひて答へず。君に目くばせして再拜して奇要を請乞せしむ。迺ち叩頭自陳して曰く、盈は小醜賤生、枯骨の餘なるも、敢へて不肖の軀を以て、龍鳳の年を慕ひ、朝菌⑩の質もて、積朔の期を求む。遠流を仰ぐと雖も、之に能く濟ること莫し。常に一旦 鑽訪⑪の難に死して、笑を世俗の夫に取らんことを恐る。王君に遭遇すれば、盈の丹苦⑫を哀れみ、粗ぼ治身の術を受く。豈に圖らんや今日 一たび聖姿を睹んことを。恍惚たる大象⑬よ、神夢に淪むが如し。生を救ひ死を護るものよ、之に歸して乞丐す。願はくは長生の要を賜ひ、暫かに行尸の身を悟らしめんことを、と。

### 【語釈】

①太玄玉女・・「玄真法」という存想法に登場する玉女。『登真隱訣』の佚文である『上清明堂元真經訣』『茅伝訣』に「玄真法。……又存日月中有女子、頭建紫巾、朱錦帔裙、自稱太玄上玄丹霞玉女、諱纏旋、字密眞」(1a～2a)、「行之五年、太玄玉女將下降於子、與之寢息。太玄玉女、亦能分形、爲數十玉女、任子之驅使也。此積感結精、化生象見、精之至也、感之妙應矣」(4a)とあり、その陶注に「太元真人、初在常山學道、夢見太玄玉女把玉札而攜之、令往西城。即是此女」(4a)とある。『上清明堂元真經訣』については、廣瀬直記『六朝道教上清派再考——陶弘景を中心に』、早稲田大学博士学位論文、2017年、101～103頁を参照。

②玉札・・ここでは仙人候補者の名簿をいう。『紫陽真人内伝』に「家有三一、長生不滅。能存三一、名上玉札」(13b)とある。

③西城・・『茅君内伝』にいう三十六洞天の一つ。『白孔六帖』(唐白居易原本、

宋孔伝統撰、宋晁仲衍注) 卷六注所引の『茅君内伝』に「大天之内有元中之洞三十六所。……第三西(域土)〔城玉?〕山之谷、周廻三千里、名曰太元揔眞之天」(四庫本、10b)とある。

④王君・・西城王君。金闕後聖帝君のもとで二十四真人を統率し、仙人候補者を選んでいる。方諸青童君の弟子であり、王遠遊ともいう。『上清後聖道君列紀』に「後聖李君上宰西城宮總眞王君」(9a)、「後聖君命王君、總司二十四真人、決下教之功。二十四真人、皆受事於方諸青童、受所教之徒於王君。王君亦先告可成者於二十四真人。真人然後受事乃教之也。聖君列紀、唯以付王君一人、使擇可授者。不盡使諸真人並傳之也」(8a)、「方諸東宮青童君、啓撰後聖道君列紀、以上呈聖君。傳青童弟子王遠遊、使下示骨相應仙之人」(6b)とある。

⑤心齋・・心をからっぽにすること。『莊子』内篇・人間世篇第四に「回曰、敢問心齋。仲尼曰、若一汝志、无聽之以耳、而聽之以心、无聽之以心、而聽之以氣。聽止於耳、心止於符、氣也者虚而待物者也。唯道集虚。虚者心齋也」とある。

⑥道真・・神格または究極の真理を表わす。小林正美『六朝道教史研究』創文社、1990年、302～304頁を参照。

⑦白玉龜山・・龜山と西王母の結びつきは、古くは『山海經』卷十二「海内北經」に「蛇巫之山上有人、操杯而東向立。一曰龜山。西王母梯几而戴勝杖」(1a)と見える。

⑧総眞・・西城王君のこと。『上清後聖道君列紀』に「後聖君命王君、總司二十四真人、決下教之功」(8a)とあることから、「総眞」と呼ばれるのだろう。

⑨肉人・・「肉人なる言葉には、洗練浄化された存在である神仙との対比のもとに、現実世界の人間が尸濁の存在であること、つまり肉体の汚濁にまみれた存在であることを痛切に自覚し、そのことを厭う気分が刻印されている」(吉川忠夫『中国人の宗教意識』創文社、1998年、146頁)。

⑩朝菌・・諸説あるが、ここでは成玄英に従ってキノコのことと解釈した。『莊子』内篇・逍遙遊篇第一に「朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋。此小年也」とあり、その疏(成玄英)に「此答前問也。朝菌者、謂天時滯雨、於糞堆之上熱蒸而生、陰溼則生、見日便死。亦謂之大芝。生於朝而死於暮、故曰朝菌」とある。

⑪鑽訪・・探訪。『周氏冥通記』卷三の陶注に「追恨不知早相共理。令闕佚漸加。鑽訪必不徒然、往矣如何。猶冀於冥途之中既更通感耳」(10b)とある。

⑫丹苦・・誠意。『真誥』卷十八の楊羲の手紙に「承給事體氣如故。且甚延悚念侍。省惶懼辭、正爾燒香、入靜具啓。夜當根陳情事、使盡丹苦之理」(3a)とある。

⑬恍惚大象・・道の形容。『老子』二十一章に「道之爲物、唯恍唯忽。恍兮忽兮、其中有象」(『老子道德經河上公章句』)とある。

### 【通釈】

六年の修行を積んで、心をこめた思いが神々に通じると、夢のなかに太玄玉女が〔仙人候補者を記した〕玉札をもって現われ、次のように言った。「西城山に王君がいらっしゃいます。本物の道を得ておられます。あなたの師とするがよいでしょう。お訪ねして教えを受けない手はありません」。翌朝、盈は目が覚めると、すぐに西城山に行った。三か月にわたって心齋（心をからっぽに）し、沐浴して彼方を望み見ていたところ、王君が神虎のひく車に乗ってやって来るのが見えた。王君は霊妙な山の頂で手綱を引いて車を止め、美しい岩山を遊ぶように飛び回った。そこで、盈は身を投げ出して険しい岩山を飛び越え、命懸けで道のことわりに帰依した。すると、いつの間にか王君のもとにたどり着いていた。

王君は黙ったまま護衛官に命じて盈を招き入れ、西城山の玉宮洞台に連れ帰った。盈はしばらくして奥に通されると、ぬかずいて長生の方法を乞うた。はいつくばってにじり寄り、何度もお願いした。すると、王君は振り返って左右の者に言った。「姿かたちからして、そやつは苦しみにとらわれてはおらぬ。志があるようじゃな」。そこで盈はようやく王君にお目通りすることがかない、くれぐれも怠けぬようにとの戒めを頂戴し、西城山の洞宮に滞在できるようになった。そして、十七年にわたって側仕えした結果、王君からそのぬかりのなさを認められ、衣服や書物、織緯の管理を任されるに至った。

それから三年が経ったある日、王君は車に乗って白玉亀山に出かけたのだが、その際に盈を連れて西王母のいる青琳宮を訪問した。すると、王母は次のように言った。「総真よ、肉人を抱えてこの霊台に登ってくるとは、なんともご苦勞なことですわね」。王君はにこにこして何も答えず盈に目くばせし、再拝して秘訣を乞うように促した。そこで盈はぬかずいてうやうやしく申し上げた。「盈は醜く卑しい干からびた骨のくずのようなものですが、恐れ多くも愚かな身をかえりみず、龍や鳳凰のような長寿にあこがれ、キノコのような短命に生まれつきながら、いつまでも長生きしたいと願っておりました。しかし、はるかな銀河を見上げてみても、そこに渡るすべはありません。探訪の難路でふと命を落とし、世間の物笑いの種になるのではないかといつも恐れておりました。ただ、王君に出会ったところ、盈の誠意を哀れんで体を陶冶する術を授けてくださったのですが、まさか今日あなた様にお目見えできようとは思いませんでした。とらえどころなき大きなものよ、まるで霊妙な夢を見ているかのようです。生死をつかさどるものよ、あなた様に帰依し乞い求めます。どうか長生の秘訣をたまわり、たちまちこの生ける屍を目覚めさせてくださらんことを」。

### 【参考】

①『雲笈七籤』卷百四「太元真人東嶽上卿司命真君伝」12a～13a

盈於恒山積六年、思念至道、誠感密應、寢興妙論、通于神夢、髣髴見太玄玉女把玉札而携之。曰、西城有王君。得眞道。可爲君師。子奚不尋而受教乎。心豁靈暢、啓徒內爽、覺悟流光之騰曄、自謂已得之於千載矣。明辰植暉、東盼霄邁、登嶺陟峻、徑到西城。齋戒三月、沐浴向望、遂超榛冒險、稽首靈域、卒見王君。後二十年、從王君、西至龜山、見王母。盈乃叩頭再拜、自陳於王母曰、盈小醜賤生、枯骨之餘、敢以不肖之軀、而慕龍鳳之年、欲以朝菌之質、竊求積朔之期。雖仰遠流、莫以知濟、津塗堅塞、所要無寄。常恐一旦死於鑽放之難、取笑於世俗之夫。是以昔日負笈幽林、貪師所生、遂遇王君、哀盈丹苦、見授治身之要、服氣之法。於是靜齋深室、造行其事。師重見告、以盈身非玉石、而無主於恒、氣非四時、常生於內。正當率御出入、呼吸中適。和液得修、形神靡錯。感應思積、則魂魄不滯。理合其分、氣甄其適、乃可形精不枯、宅不可廢也。若使精神疲於徃反、津液勞於出入、則形當日凋、神亦枯落、歲減其始、月虧其昔矣。宜便妙訪、求其長易之益。

②『茅山志』卷二十「九錫真人三茅君碑文」伝記 1a～b

感道通神、遂師西城王君。十有七年〈時年四十。〉又三年、與王君同乘駕詣龜山。

③『茅山志』卷二十「九錫真人三茅君碑文」碑文 3b

在山六年、翹勤精苦、遂仰感西城王君。親躬執事十有六年、進近衣書、預同輿駕。迺泛白水而造龜山、登青琳而詣王母。

段落 3 (3b～4a)

【原文】

母曰、子心至到哉。吾昔師元始天王、搏①桑大帝君、遺我要言。所謂玉佩金璫之道、太極玄眞之經、實天人之殊珍、上帝之奇祕。汝今日願聞之耶。言畢、勅王君解釋玄眞之經、自敷玉珮金璫之文。復向說、元始天王、大帝君、言是太霄二景隱書、又有陰陽二景內眞符、與本文相隨、太上法、惟令受諸司命。子玉札玄挺、素書上清、當爲上卿之君、司命之任。此道後當別付於子也。然不先聞明堂玄眞之道、亦未②由得太霄隱書。玄眞之道、是食日月之法、鍊五神之術耳。非總眞弟子不教、〔非〕③司命之挺不傳。受命言訖、王君與君還西城、依承眞訣、按而行之。三年目有神光、面生玉澤。王君賜九轉還丹一劑、神方一首、立壇結誓、不許宣泄。迺使君歸、仍告之曰、子道已成。後百年求我於南嶽。授子仙任於吳越矣。

【訓読】

母曰く、子心至りに到れるかな。吾れ昔 元始天王①、扶桑大帝君②を師とするに、我に要言を遺す。所謂玉佩金璫の道③、太極玄眞の經④、實に天人の殊珍、上

【校訂】

①搏・・雲笈本には「扶」に作る。訓読以下、こちらに従う。

②未・・雲笈本には「無」に作る。訓読以下、こちらに従う。

③非・・『上清明堂元眞經訣』「茅伝訣」の「非總眞弟子而不教、非司命之挺而不傳矣」(1a)という一文によって「非」を補う。

帝の奇祕なり。汝 今日之を聞かんことを願ふか、と。言ひ畢れば、王君に勅して玄眞の經を解釋せしめ、自ら玉珮金璫の文を敷く。復た向に説く、元始天王、大帝君、是の太霄二景隱書⑤には、又た陰陽二景内眞符⑥有りて、本文と相ひ隨ふも、太上⑦の法は、惟だ諸を司命に受けしむるのみと言ふ。子 玉札玄挺し、上清に素書せらるれば、當に上卿の君、司命の任と爲るべし。此の道は後に當に別に子に付すべきなり。然れども先づ明堂玄眞の道⑧を聞かざれば、亦た太霄隱書を得るに由無し。玄眞の道は、是れ日月を食するの法⑨、五神⑩を鍊るの術なるのみ。總眞の弟子に非ざれば教へず、司命の挺に非ざれば傳へず、と。受命の言訖はれば、王君と君と西城に還へり、眞訣を承くるに依りて、按じて之を行なふ。三年にして目に神光有り、面に玉澤を生ず。王君 九轉還丹⑪一劑、神方⑫一首を賜はり、壇を立て誓ひを結び、宣べ泄らすことを許さず。迺ち君をして歸らしむるに、仍りて之に告げて曰く、子 道已に成れり。後ち百年にして我を南嶽に求めよ。子に仙任を呉越に授けん、と。

### 【語釈】

①元始天王・・西王母の師。管見の限り、『茅君内伝』のこの部分が最も古い出典である。後の上清經と靈寶經にも高位の神格として登場し、原初の時空に生まれたとされる。『洞真上清青要紫書金根衆經』卷下「元始天王經」に「元始天王、稟天自然之胤、結形未沌之霞、託體虚生之胎、生乎空洞之際」(1a)とある。また、『元始上真衆仙記』には「眞書曰、昔二儀未分、溟津鴻濛、未有成形天地、日月未具、状如雞子、混沌玄黄。已有盤古真人、天地之精、自號元始天王」(2a)とあり、盤古真人の号とされる。なお、『衆仙記』は冒頭に「葛洪枕中書」とあるが、二許が真人になったことに言及するため、葛洪の時代のものではないと考えられる。

②扶桑大帝君・・上清經の伝授に関わる高位の神格。東海の仙島の一つ八滄山にいとされる。『真誥』卷十四に「八滄山高五千里、周匝七千里、與滄浪方山相連比。其下有碧水之海、山上有乘林真人鬱池玄宮。東王公所鎮處也。……在滄浪山之東北。蓬萊山之東南。〈此即扶桑太帝所居也〉」(19b ~20a)とある。また、「黄庭内景經序」に「扶桑大帝君命暘谷神仙王傳魏夫人」(『雲笈七籤』卷十一、1b)とあるように、魏夫人に『黄庭内景經』を授けたとされる。「黄庭内景經序」については、金志珪「『黄庭内景經序』小考—その成立と性格について—」『中国思想史研究』第29号、2009年を参照。

③玉珮金璫の道・・『玄真經』の次の段階で行なう修行法。太極に登ることができるとされる。『真誥』卷九に「太上玄眞經、先盟而後行。行之然後可聞玉珮金璫之道耳」(19a)、同卷五に「君曰、仙道有玉珮金璫、以登太極」(4a)とある。

④太極玄眞の經・・『玄真經』。『上清明堂元真經訣』に「白玉龜臺九靈太眞元

君西王母授説明堂玄真經曰、大上玄玄、二氣洞明。玄真内映、明堂外清。吞息二暉、長生神精。上補司命、監御萬靈。六華充溢、徹見黃寧。〈此四十字即玄真之本經也。其後皆王母總真更演說行事之法耳〉(1a)とあり、四十字からなる「玄真の本經」が示されている。『玄真經』については、金志珪「伝・訣・經——上清經の形式についての略論」『中国思想史研究』第34号、2013年、136～140頁を参照。

⑤太霄二景隱書・・「玉佩金璫の道」あるいは「玉珮金璫の文」のこと。『太上玉佩金璫太極金書上經』に「玉佩太霄隱書洞飛宝經」(4a～6b)と「金璫太霄隱書洞飛宝經」(16b～19a)という節があり、「太霄二景隱書」に対応すると考えられる。

⑥陰陽二景内真符・・『太上玉佩金璫太極金書上經』に「太極金書秘字三元九真陽符」(9b～16b)、「太極金字玉文九真陰符」(19a～22b)という節があり、「陰陽二景内真符」に対応すると考えられる。ただ、『太上玉佩金璫太極金書上經』は『茅君内伝』などの記述にもとづいて東晋末以降に作られた上清經だろう。廣瀬直記『六朝道教上清派再考』、早稲田大学博士学位論文、2017年、235～238頁を参照。

⑦太上・・太上玉晨大道君のことだろう。『真誥』では太上という神が真人の官僚組織の上に君臨しているとされ、「道成、受太上書、署爲紫清上宮九華真妃者也」(卷一、12b)や「然未受太上書、猶未成真焉」(卷十四、15a)のような記述が見られる。この太上は『真誥』巻五に「君曰、太上者道之子孫。審道之本、洞道之根、是以爲上清真人。爲老君之師。〈此即謂太上高聖玉晨大道君也。爲太極左真人中央黃老君之師〉」(1b)と見える太上のことであり、陶弘景によるとそれは太上高聖玉晨大道君のことだという。太上玉晨大道君が最高位の神格だったことは、たとえば『真誥』巻九の「四朝太素三元君法」に「謹啓太上大道高虛玉晨、太素紫宮八靈三元君、中央黃老、無英、白元太帝、五老高真上仙、太極皇精三皇君」(14b)とあって、上啓対象の先頭に置かれていることからもうかがわれる。

⑧明堂玄真の道・・『玄真經』とその口訣(玄真法)からなる修行法。日月の光芒および太玄玉女を存思する。『上清明堂元真經訣』『茅伝訣』に見える。「玄真法」では日月が明堂に宿るとされるが、この明堂は眉間から一寸入ったところにあるとされる明堂宮のことだろう。『上清明堂元真經訣』に「若不得服時、當存二景還明堂中、日左月右、令日月光輝、與目瞳合照、四映二氣、使相通注也。亦可常存日月在明堂中」(3b、陶注省略)、『登真隱訣』巻上「九宮」に「兩眉間上、却入三分爲守寸雙田。却入一寸爲明堂宮」(3a、陶注省略)とある。

⑨日月を食するの法・・「明堂玄真の道」がこう呼ばれるのは、『上清明堂元真經訣』に「日色赤、月色黃。日有紫光九芒、月有白光十芒。使日月對口相去九尺、光芒向口、芒直如弦、以入於口也」(1b-2a)とあるからだろう。

⑩五神・・『上清明堂元真経訣』には五神に対する直接の言及は見られないが、「我乃微祝曰、……五藏生華、開童反顔」(2b-3a)という一文が見えるため、五臓の神々のことと解釈してよいだろう。なお、『真誥』では「君曰、當存五神於體。五神者謂兩手兩足頭是也」(巻五、10b)のように、両手、両足、頭の神々を五神と呼ぶこともあるが、「叩齒當臨目、存見五藏具、五神自然存也」(巻十、11b、陶注省略)のように、五臓の神々を五神と呼ぶこともある。

⑪九転還丹・・『太極真人九転還丹経要訣』に用薬法および西城王君の口訣が見える。その内容の一部は『太平御覧』巻八百十一、八百十二、九百四十二に「茅君内伝曰」として引用されている。したがって、『茅君内伝』には本来、西城王君が茅盈に授けた九転還丹に関するまとまった記述が存在したものと考えられる。Isabelle Robinet, *La révélation du Shangqing dans l'histoire du taoïsme*, École Française d'Extrême-Orient, vol. 137, Paris, 1984, pp. 395-396を参照。なお、九転の丹に関する記述は古くは『抱朴子』内篇・金丹篇に見える。

⑫神方・・『太極真人九転還丹経要訣』に見える「黄帝四扇散方」と「王母四童散方」のことを指すか。これらは九転還丹を服用する前に飲むべき薬とされる。

### 【通釈】

すると、西王母は次のように言った。「あなたは本当に用意周到なのですね。わたくしは昔、元始天王と扶桑大帝君に師事しておりました。その際に秘訣を残していただいたのですが、それが「玉佩金璫の道」と「太極玄真の経」、すなわち天人の珍宝、上帝の秘宝とされるものです。あなたは今日その教えを聞きたいというのですか」と言い終わると、王君に命じて「玄真の経」について講釈させ、みずからも「玉佩金璫の文」について説明した。また、前後して次によようにも言った。「元始天王と大帝君がおっしゃるには、「太霄二景隠書」の本文には「陰陽二景内真符」が付随しているが、そのような太上の法は司命神にしか授けてはならぬ、とのこと。あなたは奥深い道理によって〔仙人候補者を記した〕玉札上に選抜され、上清天〔の名簿〕に白字で記されていますから、きっと高位高官たる司命神に任命されるはず。したがって、この道は後ほどまた別に与えることになるでしょう。しかしいづれにせよ、まずは「明堂玄真の道」について学ばなければ、「太霄隠書」を手に入れることはできません。「玄真の道」は日月の精気を摂取する法、五臓の神々を錬養する術に過ぎませんが、総真の弟子でなければ教えられず、司命神候補者でなければお伝えできないものです。」

西王母からの受命の言葉が終わると、王君と盈は西城山に帰った。盈は授かった真訣を拠り所に、要点を押さえながら修行した。三年が経つと目に神光が宿り、顔に玉のような光沢が生じた。王君は盈に九転還丹一劑と神方一首を授け、

壇を立てて誓いを結び、教えを漏らすことを固く禁じた。そして、盈を故郷に帰らせる段になると、次のように告げた。「おまえの道の修行はすでに完成した。百年後、わしを訪ねて南嶽に来るのじゃ。呉越の地の仙官(司命)に任命しよう。」

【参考】

①『雲笈七籤』卷百四「太元真人東嶽上卿司命真君伝」13a～14a

西王母曰、子心至矣。吾昔先師元始天王、及皇天扶桑太帝君、見遣以要言。汝願聞之邪。於是口告盈以玉珮金璫之道、太極玄眞之經。盈拜受所言、稽首而立。又告盈曰、夫金璫者、上清之華蓋、陰景之内眞。玉珮者、太上之隱玄、洞飛之寶章。得其道者、皆上陟霄霞、登遊太極、寢晏高空、游行紫虛也。向說元始天王、太帝君言、是太霄二景隱書玉珮金璫之文章也。又有陰陽二景内眞符、與本文相隨、太上法、惟令授諸司命。子玉札玄挺、録字刊金、黃映内曜、素書上清、似當爲上卿之君、司命之任矣。此道後別當付於子也。然不先聞明堂玄眞之道、亦無由得太霄隱書也。

②『茅山志』卷二十「九錫真人三茅君碑文」伝記 1b

王母授經、仍隨王君還西城。修法三年〈時年四十七。〉顔如玉童、體有光照。王君復賜九轉還丹一劑。君道廼成〈時年四十有九、武帝天漢四年。〉

③『茅山志』卷二十「九錫真人三茅君碑文」碑文 3b

受玉珮金璫之文、太霄隱書之道、遂得還形玉狀、反少天姿。王君廼告君曰、子道已成、可以反矣。復百年求我於南嶽、授爾仙任於呉越也。

待続